

〔研究ノート〕

江戸時代前期における白描（淡彩）物語絵の展開の一端
―住吉派系の作品に注目して―

「白描」とは、墨による描線を主体とした絵画表現の一つであり、密教図像や物語、歌仙などを描く際の描法として好まれました。白描の物語絵は平安時代から描かれていたことが文献から推察されますが、作例は鎌倉時代以降のものが残されています。鎌倉時代には、専門絵師による精緻な作風と、素人の手によると考えられる素朴な作風が見られましたが、室町時代には後者の作風のものが増加します。特に白描の小絵（小型の絵巻）は、着彩画に比べ簡単に描きやすく、物語に親しんだ貴族の女性たちなどが物語を描く際に取り入れやすい描法であったと考えられます。

江戸時代に入ると、専門絵師による精緻な白描物語絵が再び積極的に制作されます。その初期の代表作を描いたのが土佐光則（天正11～寛永15年／1583～1638）です。光則は、フリア美術館蔵「白描源氏物語画帖」など、白描の源氏物語絵を多く残しています。縦横の長さが10数cmほどの小さな色紙に描かれますが、室町時代の白描小絵に見られる素人風の大きな画風とは異なり、専門的な技術に裏づけられた繊細な描線によって緻密に描かれています。光則以降、土佐派や土佐派の分派である住吉派周辺において、白描の物語色紙絵作例が多く見られるようになります。江戸時代の作例では淡彩を加え、白描淡彩とも言える作品が増えます。画面全体に淡彩を施すのではなく、白地を敢えて残しているため、淡彩画とは区別され、白描の趣きを継い

だものとなっています。こうした江戸時代前期の白描淡彩の物語絵の中から、住吉派周辺で描かれた作例を通じて、その展開を見ていきたいと思います。

住吉派の祖、住吉如慶（慶長4～寛文10年／1599～1670）の物語絵の基準作としては、「源氏物語画帖」（サントリー美術館蔵、図1）などが知られますが、淡めの彩色が全体に施されており、白描淡彩とは言えません。落款・印章はないものの如慶筆の伝承のある白描淡彩の物語絵が、白鶴美術館蔵「源氏物語画帖」（図2、以降白鶴本と表記）です。

あとけない表情の顔貌描写は、如慶の画風に類似していますが、如慶作品に比べ、人物の目の幅がやや狭く、樹木の表現も、水墨画的な要素を取り入れた軽やかな筆致の如慶作品に比べ、描線が固く、規則的に点苔を施すなど、少し煩瑣な表現となっており、如慶に近い絵師による作と考えられています。白鶴本は特に桜の描き方に特色があり、横縞を重ねて幹を表し、外隈を施し淡墨の斑点を散らして花を表します。こうした白鶴本の樹木や顔貌の描写と共通する特色を持つ作品として、チエスター・ビーティー・ライブラリー蔵「源氏物語扇面画帖」、九曜文庫蔵「源氏物語扇面画帖」（図3）が知られており、如慶周辺の絵師を中心とする工房によって描かれたと思われます。また、鉄心斎文庫蔵「伊勢物語扇面画帖」（図4）も同様の画風の作品として挙げることができます。全て白描淡彩の手法で描かれており、この工房が特に白描淡彩の物語絵を

得意としていたことが窺えます。

この四点の作品群をAグループとすると、Aグループに部分的に通じる描写が見られる作品群（Bグループとする）が、名古屋博物館蔵「源氏物語画帖」、「源氏物語画帖」（図5）、「白描源氏絵屏風」（色紙貼屏風、図6）です。ほぼ同じ構図をとる場面が多く、画風も酷似しています。この三点も白描淡彩であり、やはり白描淡彩の物語絵を得意とした工房のようです。Aグループの人物は丸顔に弓目鉤鼻で描かれていますが、Bグループの人物は面長で、目は点に近づくなど相違点も多いですが、外隈を施し淡墨の斑点を散らす桜の描き方などには、Aグループの特徴と似通う点が認められます。

「源氏物語画帖」（図5）には、如慶の子、住吉具慶（寛永8～宝永2年／1631～1705）筆の源氏物語絵巻の構図に類似するものが多いことが指摘されており、Bグループは具慶周辺の絵師によって制作された可能性が考えられます。Aグループが如慶の画風によく似ており、貴顕の書いた詞書を伴い、高位の人物の依頼により制作されたと考えられるのに対し、Bグループは詞書を伴わず、画風は具慶のものから距離があり、やや仕込み絵的な要素が大きくなっています。

続いて注目したいのが、鉄心斎文庫蔵「伊勢物語彩色絵入」（図7）です。こちらも白描淡彩の物語絵です。衣裳の模様や規則的な点苔の施し方に、Bグループの描写と通じる特色が認められますが、女性の黒髪が体の曲線に沿わずに直線的に表されていたりするなど、類型化した表現が増えています。また、色紙絵や扇面画ではなく、奈良絵本と呼ばれる肉筆の絵入り写本となっています。江戸時代前期の奈良絵本には、濃彩だけでなく、白描淡彩のもの

もしばしば見られます。その中には、鉄心斎文庫蔵「伊勢物語彩色絵入」と類似する画風のものもあり（Cグループとする）、奈良絵本を手掛ける工房の中には白描淡彩の描法を専らにするものもあったと考えられます。AからBへ、そしてCグループへと単純に展開するわけではないですが、白描淡彩の物語絵がより多様な読者層に向けて広がっていく一端が窺え、興味深いです。また、白描淡彩で表される物語は、鎌倉時代の白描物語絵と同様、王朝物語が好まれており、白描（白描淡彩）が、王朝美をイメージさせる表現方法として受けとめられていたことが窺えます。

（宮崎もも）

※図1は『江戸のやまと絵―住吉如慶・具慶―』（サントリー美術館、1985年）、図2・5は『白描絵』（和泉市久保徳記念美術館、1992年）、図3は『源氏物語扇面画帖 九曜文庫蔵』（勉誠出版、2007年）図4は『鉄心斎文庫所蔵芹澤新二コレクション展、伊勢物語とその周辺』（鉄心斎文庫伊勢物語文華館、2003年）、図6は『京都古書籍・古書画資料目録』11号（2010年）、図7は『鉄心斎文庫所蔵伊勢物語図録 伊勢物語文華館第一集』（鉄心斎文庫伊勢物語文華館、1991年）から複写しました。

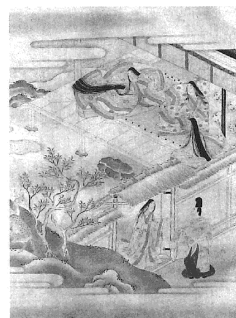


図7



図1



図2

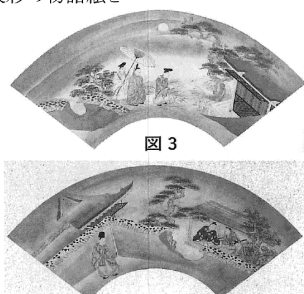


図3



図4

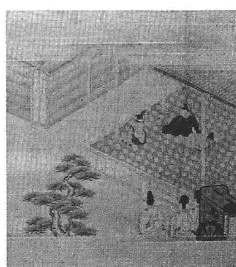


図5

季刊 美のたより No.186

平成26年4月8日

発行 大和文華館